

2022年5月22日（日）

宣 教 「イエスは生きておられる」

聖 書：ルカによる福音書24章13節～35節

みなさん、おはようございます。

今日の聖書の個所は、ルカによる福音書に記されたイエスさまの復活された話で、復活された日に起こった出来事が記されています。ちなみにルカは医者で歴史家であったと言われています。文書を書くのが得意な人であったようで心に残るイエスさまの話されたたとえ話しなどが多く記録されています。

「13:ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、」とあります。

イエスさまが復活された、ちょうどこの日のこと、エルサレムから六十スタディオン、11Kほどになるようですが、エマオという村へ二人の弟子が向かっていたのです。

エマオの場所は聖書（新共同訳）の後ろの地図6にあります。エルサレムの町から地中海の方へ西へ向かった所です。この二人は、12弟子の二人ではなかったようです。イエスさまの弟子たちは、12人以外にもいたことが分かります。共に神の愛の働きに言葉と行いで参加していた人たちです。ここにいるわたしたちもイエスさまの弟子であると言って良いのです。二人がエマオの村に向かっている姿を描いた有名な絵画がありますが、御覧になった方もおられるのではないかと思います。

14:この一切の出来事について話し合っていた。

15:話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。

二人はイエスさまのこと、得に十字架の出来事について、イエスさまの死について語り合っていたのです。「話し合っていた。」2人はどんな心境だったのでしょうか。どうして、なぜ、イエスさまは十字架につけられ死んでしまわれたのか。二人はまだイエスの復活のことは知らなかったのではないかと思います。きっと気落ちして、がっかりして、何でこんなことが起こるのかとの沈みきった思いで、エマオに何の用があったのかは知りませんが、エマオに逃げるようにして向かったのでしょうか。そのような悲しみの中にある二人に、イエス御自身が近づいて来て、一緒に 歩き始められたのです。

「近づいて来て、」、英語で **Draw near** とあり、イエスさまの方から気落ちしていたであろう二人に近よられたのです。しかし、二人はイエスさまに気づか

なかったのです。

16:しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。とあります。誰か人が近づいて来たことは分かりましたが、イエスさまだとは分からなかったようです。イエスさまの姿は、どのようであったかは分かりませんが、二人が生前見ていたイエスさまの顔ではなかったようです。

聖書記者ルカは「しかし、二人の目は遮られていて、」と、興味深い、意味深長な言葉つかいで記しています。しかし、二人には、肉眼では分からない姿で、です。二人の目は、心の曇り、悲しみや絶望、恐れや不安から遮られていたようです。

今日においても、イエスさまは、清き、愛の聖霊として、自らわたしたちに近づいて来てくださるのです。肉眼では、心が悲しみのや罪の闇に遮られて、イエスさまに気づかないことが多いのかもしれないと思います。心の目で、信仰の目で見るといふことの大切さを思わされます。

さて、

17:イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。

そして、イエスさまの方から二人に尋ねられたのです。

「やり取りしているその話は何のことですか」と。二人は「暗い顔」悲しい顔をしていたのです。気落ちした二人を心配されるイエスさまを思いました。

そこで、二人は水が堰を切ったかのように、一気に語り出します。

18:その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在してい

ながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」ここには、エルサレムの町にしながらイエスの身に起こった十字架の死のこと知らない人への批判のような気持ちがあるように思えました。「あんたは、知らないのか！」イエスの十字架を。エルサレムの町にいてあのことを知らないのはきっと、あなただけですよ！と。わたしは、やるせない二人の思いを感じるのです。

しかし、主イエスは冷静です。

19:イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言います。

「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。

「ナザレのイエスのことです。」イエスさまのことが二人の心にはあるのです。ナザレのイエスのこと、この言葉のなかに二人のイエスへの思いが溢れているかのようです。その意味で、この「ナザレのイエス」という言葉は大切なことばだと思わされます。二人の信仰の告白でもあるかののように思えます。

クレオパは続けて、

20:それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。

21:わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。

ユダヤのリーダーたち、権力者がイエスを十字架につけたことを語ります。そして彼らのイエスに対する正直な思いが語られます。

「**21:**わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」このイエスに対する理解は、この二人だけの理解ではなく、**12** 弟子たちの理解であり、イエスに従っていた人たちの理解でもあったように思えます。「あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」時は古代最強であるローマ帝国支配の時代です。弟子たちもこの二人も、イエスを地上の王として、イエスを、栄光のメシア（救い主）として、信じる信仰を持っていたのです。

しかし、これはイエス理解の不十分な理解なのです。

そこで、イエスは**25** 節以下で言われました。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、**26:**メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」 **27:**そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」 **26:**メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」これはイザヤ書**53** 章 (P1149) に記された苦難のしもべの姿としてのメシアの姿なのです。苦難なしの十字架なしの救い主の栄光はないということなのです。もし人が基督教の信仰に、この世的な生活の安定、立身出世だけを求めるなら、ついにその人は、残念ながらイエスから離れて行くことが多いのだと思えます。伝道者パウロのことばフィリピの信徒への手紙**1** 章 **29** 節のことばを思うのです。パウロの体験からのことばです。「つまり、あなたがたは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。」とある通りです。

イエス・キリストの苦難（十字架）と栄光ということを今日、しっかりと聞きましよう！そして、それを生涯心に刻んでおきたいと願います。そのことはわたしたちの神さまへの信仰を、きっと支えてくれる確実な力となるのです。このことを知った者は、主の愛によって強く深く練られて行くのです。

二人は続けて、

22:ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、

23:遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。

ちなみに、この「イエスは生きておられる」という文章が、今日の聖書個所のルカによる福音書の13節から33節前半の物語の内容的にも文書構造としても中心に位置していると言われています。

この「イエスは生きておられる」を中心にして開いた扇を二つに折ると、内容的にも重なるようになるのです。これは、キアスムス{交差配列法}と呼ばれます。関心のある方は、13節～33節前半を調べてみてください。文書を記すのに長けた聖書編集者ルカのなせる業だと思えます。

24:仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

25:そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、

26:メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

27:そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

二人は旅を続けて、目指すエマオに着きました。

28:一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。

29:二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

三人は共に一晩すごします。

30:一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

31:すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

共に食事をする中で、この時、二人の目が開け、共に歩いて来た人がイエスだと分かったのです。この食事は聖餐式を思い起こさせてくれます。

イエスさまは、パンにご自身の体、十字架の苦しみと愛・罪人を救われる神

さまの憐みを重ねて、パンを裂いて二人にお渡しになったのです。二人にとってきっと生涯忘れられない出来事となったことでしょう。

32:二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

「燃える」というギリシア語カイローには、燃える、明るくする、光するという意味もあるようです。イエスと共に歩く時、悲しみで冷めていた心が燃えあがり、闇に閉ざされた心に明るい光が注がれるのです。これは二人の力ではなく、神さまの愛の力がそうしてくださったのです。

ここにいるわたしたちにもそのようなことは起こるのです。

二人は、エルサレムへと出発しました。これは決して戻るのではなく、二人にとっては、リスタート！イエスを伝える新たな出発の時でもありました。

33:そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、 34:本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。

35:二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。二人は復活されたイエスの証言者となったのです。

こうして、悲しみと絶望、不安と恐れに支配されていた弟子たちは立ち上がって行ったのです。みなさん、今日の聖書の物語を通して、ここにいるわたしたち、それぞれのエマオへの道があるのだと思います。そして愛なるイエスを伝える者たち、証し人とされて行くのです。

共に、あの時「わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合うことを大切にしたいと願います。